

令和6年度

帝塚山学院泉ヶ丘高等学校
入学者選抜試験問題

高校入試

国語

(試験時間 60 分)

受験番号	
------	--

□ 中学の美術科の講師「隆文」たかふみは大学時代を過ごした京都へ修学旅行の引率でやってきたが、自由時間を孤独に過ごす女子生徒「川野」と行動を共にすることになった。よく読んで後の問いに答えなさい。

「これからどうする？ またコーヒーでも飲むか？」

① 川野は黙っている。隆文は返事をあきらめ、川野を目でうながして大鳥居のほうへ注 1 踵きびすを返した。

「ひとつだけお願いしてもいいですか」

意を決したふうに川野が切り出したのは、鳥居を過ぎてすぐだった。意表をつかれ、隆文はどぎまぎして答える。

「いいよ、もうとことんつきあうよ」

「じゃあ」

川野は隆文の目を見て続けた。

「先生の絵を見たいです」

「は？」

② まぬけな声が出た。言われている意味がのみこめなかった。

「だってせっかく京都に来たんだし。学生時代に描いたやつ、どこかにあるんじゃないですか」

川野は真剣だった。

「そんなの残ってないって」

隆文は苦笑した。さっきの喫茶店で勘違いさせてしまったのかもしれない。あそこに飾られていたのは、いくら若手の無名作家とはいえ、少なくともちゃんと値段がつき売りものとして認められる絵である。たいした才能もない一学生の描いた絵を、わざわざ保管してくれるような場所なんかはない。大学に置いてきた、③ 正しくは置き捨ててきたものも、とつくに処分されているだろう。

「あ」

声を上げた隆文を、川野がいぶかしげに見上げた。

「先生？」

「まだ残ってるかどうかはわかんないけど」

川野の望みをかなえられるかもしれない場所が、ひとつだけある。

夏休みの大学構内は閑散としていた。

正門を抜け、正面にそびえている本校舎の時計台を過ぎて、奥へ進む。

(中 略)

ようやく端までたどり着いたときには、息がはずんでいた。白っぽい夏の光に照らされた外壁と向かいあい、深呼吸をする。十五年前と、変わっていない。

窓枠を囲むように、深緑の蔦が這っている。ぶつくりとかわいらしいハート型をした大小の葉の上にてんとう虫やかぶと虫がとまっている。黄や青の色鮮やかな蝶が数羽、その周りを飛び回っている。

足もとに並んでいる背の低い植えこみの奥からは、うさぎや鹿が 1 と顔をのぞかせていた。鹿の背中には子猿がまたがり、いたずらっぽく片目をつむっている。手前では白と黒のまだらの牛が目を細めて草を食んでいる。隣にはりすもいる。牛とりすはほとんど同じ大きさである。

「これ、先生が描いたんですか？」

隆文の横に立ちつくしていた川野が、ささやいた。

「うん」

正確には、隆文が描いたというより、隆文も描いたと答えるべきだろう。

あの日も暑かった。卒業を控えた、大学四年の夏だった。隆文たちはグループ課題のためにE棟へ集まった。六人で協力して一枚の大きな絵を完成させるという宿題が、休み前に出されていたのである。

クーラーのない教室は、こもった熱でサウナと化していた。全員がほぼ同時に、つまり教室に入った瞬間に、やる気を失った。裏庭へ出てみたのは、風があるだけ外のほうがまだましだったからだ。

紙よりも壁に描こうと言いだしたのが誰だったかは、よく覚えていない。仲間うちでは一番しつかり者で、リーダー格だったユウタだろうか。それとも、常にとつぴなアイデアを胸の中であたため、隙あらば皆を巻きこもうとねらっていたシュウ

だろうか。ともかく、いつのまにか六人ともが夢中で壁に向かっていた。汗と絵具にまみれ、一心に筆を動かしているうちに、やがて誰からもなく笑い出した。わけもわからず爆笑しながら、それでも手は休めなかった。

壁画という発想はおもしろいし、六人六様の筆遣いが無秩序にまざりあっているのも斬新で、なかなかうまく描けたと思つたのに、担当教官の反応は 2 だった。上からペンキを塗って元どおりに戻しておくようにと渋い顔で言い渡され、その場ではうなずいたものの、もちろん誰もそんな手間をかけるつもりはなかった。建物の裏側に回らなければ見えない場所なので、教官もそのまま忘れてしまったらしく、重ねて催促されることもないまま卒業してしまつた。

ひっそりと生き残っていた思い出の絵を 3 と眺めて、隆文は思わずつぶやいた。

「④ 下手だな」

あれほど自信満々だったのに、こうしてあらためて見てみたら、子どものお絵かきに毛の生えたような出来^{でき}だった。六人がそれぞれ気の向くままに筆を動かした結果、構図はとんでもなくバランスを欠いているし、色の組みあわせもひどくちぐはぐだ。どうひいきめに見ても、美大生が胸を張っていい作品ではない。あのときは憤慨した教官の冷やかな態度も、今となつてはうなずける。

ぷつと音を立てて川野がふきだした。

「笑うな」

隆文はむつとして抗議した。見たいというから連れてきてやったのに、笑われる筋あいはない。

川野はしばらく口を 4 させていたが、

「ああもう無理」

と宣言すると、けらけらと本格的に笑いはじめた。

「先生、また、絵、描いたら、いいじゃ、ないですか？」

発声練習のようにぶつぶつと言葉を区切って、言う。息継ぎのリズムがおかしくなっている。

「なんでだよ」

隆文は ⑤ 2 無^{ぶぜん}然として答えた。

「だって」

くくく、と喉の奥からこみあげてくる笑いとともに、川野が続ける。

「大きくなって、前よりうまくなってるかもしれないですよ」

「川野も、美大とか、行って、みれば？」

おとなげないとは知りつつも、隆文も^⑤お返しに妙な節をつけて言っただけ。

試験に受かるかは保証できないけどな、もしかしたら仲間ができるかもよ、まあその性格じゃ無理かもしれないね——立て続けに浮かんできた皮肉な言葉を、口にはせずにのみこんだのは、川野があんまり楽しそうだったからだ。歯茎を見せ、腹を抱え、いつまでも笑っている。

⑥ なんだか新鮮な気分、隆文は隣をうかがう。川野はこういう顔で、こういう声で、笑うのか。これまでは笑顔といっても嘲笑や苦笑のそれだったから、こんなに晴れ晴れとした表情を見るのははじめてだ。

川野は一向に笑いやまない。とりあえず気のすむまで放っておくことにして、隆文はまた壁面に向き直った。何度見てもやっぱり下手くそだ。

川野の言ったとおりなのかもしれない。もしかしたら、あの頃よりも今のほうが、上手に描けるかもしれない。そんな可能性があるなんて、想像してもみなかった。黄金色に輝く大学時代が過ぎて、すべては闇に沈んだはずだった。夏は終わり、寒い冬がやってきたはずだった。

だからしょうがないと割りきっていた。この状況でじたばたしても意味がない。潔くすべてを受け入れ、ややこしいことは考えず、あきらめてやっていくしかない、と。

うまうまいかないこと全部、周りのせいにしてるだけ——^⑦ さつき川野に対して投げつけようとした言葉が、不意によみがえる。^⑧ じわりと頬が熱くなる。

「美大かあ。いいなあ」

まだ唇の端に笑みを残したまま、川野がうっとりつぶやいた。子どもじみた口調につられて、隆文は口を開いていた。

「教えてやってもいいよ」

「先生が？」

川野がきよんととして聞き返した。

「いや、実技はしっかりと練習しとかなないと大変だから。学校ごとに癖もあるし」

⑧ 隆文は早口で答えた。自分の口走った内容に、おそらく川野に負けないくらいびつくりしていた。やけに教師っぽいことを言っている。

「ちよつと気が早いかな。まだ受験まで四年もあるんだもんな、これからおいおい準備していけばいいよな」
急に照れくさくなってきて、中途半端に話を切りあげる。

「いえ」

川野が高らかに即答した。

「いいです、先生は。遠慮しときます」

おもむろに腰に手を当て、わざとらしく壁画を眺め回している。隆文は深くため息をついた。

「お前、ほんつとに感じ悪いな」

川野が再びくすくすと笑いはじめた。つられて隆文の口もともゆるむ。まぶしい陽ざしを浴びた動物たちも、ほがらかな微笑を浮かべて、じつとふたりを見守っている。

(瀧羽麻子「真夏の動物園」)

⑨ 1 踵を返した……ひき返したということ。

⑨ 2 惘然……ここでは不機嫌そうな様子のこと。

⑨ 3 さつきく言葉……この場面の直前に二人は口論しており、そのとき川野に対して言おうと思った言葉のこと。

(一)——①「川野は黙っている」とあるが、この時の川野の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 隆文とは共通の話題もないので、自由時間が終わるまでどう過ごせばいいだろうかと考えている。

イ 隆文が美大生だった頃に描いた絵を見たいという気持ちを、言い出してよいものかと考えている。

ウ 隆文と一緒に美大に行ったとしても、隆文の絵が残っているかどうかかわからないと考えている。

エ 隆文に美大への進学について相談することが、はたして進路選択に役に立つのかと考えている。

(二)——②「まぬけな声が出た」とあるが、この時の隆文の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア とりたてて行きたい場所などないように見えた川野が「ひとつだけお願いしてもいいですか」と行きたいところがあると伝えてきたことと自体意外だったが、隆文の絵を見たいというのは全く予想もしていなかったことだったので、川野が何を求めているのかとつさには判断できずにいる。

イ コーヒーでも飲んで残りの時間を無難に過ごすことだけが川野の希望だろうと考えていたが、「ひとつだけお願いしてもいいですか」ということばから、川野にも修学旅行を楽しもうとする気持ちがあるのを意外に感じ、川野の気持ちを簡単に決めてかかってしまった自分をおかだと感じている。

ウ 川野の態度から修学旅行を楽しもうという気などないと考えていたため、残りの時間をつぶすためだけに喫茶店に誘ったのに、川野が「ひとつだけお願いしてもいいですか」と言って喫茶店などには行きたくないという意味表示をしてきたことを不愉快に思うと同時に意外にも感じている。

エ 川野はまだ行きたい場所を決めていないだろうと行き先を考えるために喫茶店へ行こうと誘ったのに、川野の「ひとつだけお願いしてもいいですか」ということばから、隆文の絵がまだ大学に残っていることを川野が知っていてそれを見に行きたいと言っていることがわかり、驚きを隠せずにいる。

(三) — ③ 「正しくは置き捨ててきた」とあるが、この表現から現在の隆文は自分の大学時代をどのように考えているとわかるか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 画家になる夢を捨ててしまった今となっては、画家になろうと努力していた過去は美しい思い出としてそっとしておくべきだと考えている。

イ 自分には才能がなく画家になることは出来ないと思い、大学で画家になろうと努力したときのことなどは忘れてしまおうと考えている。

ウ 中学生に美術を教える教師としての面白みのない生活に比べて、美大での楽しかった日々こそが人生で一番よい時期だったと考えている。

エ 教師として働く今の自分からみると、美大での活動は決してほめられるようなものではなかったので隠しておくほうがよいと考えている。

(四) 1 4 に入る最も適当なことを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

ア つくづく イ どんどん ウ さんざん エ むずむず オ ちらちら

(五) — ④ 「下手だな」とあるが、この時の隆文の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 壁に六人で絵を描くという当時の自分たちにとっては目新しい方法を用い、その時は充実感にあふれて絵を描いていた。しかし、今あらためて見ると、技術的にひどい出来栄であつたと分かり、自分たちの絵ながらあきれている。

イ 当時は夢中になって六人で絵を描きながら、わけもわからない楽しみを感じていた。しかし、今あらためて見ると、エネルギ―にあふれているだけの若者向けの絵だと気がつき、年をとった人の心には響かない絵だと苦々しく思っている。

ウ 六人がそれぞれの良さを発揮して絵を作りあげることができ、当時は心から良い作品だと思っていた。しかし、今あらためて見ると、教官の教えを無視するような作品であり、生意気だった自分たちを恥ずかしく思っている。

エ 美大には例がないような独創的な発想で絵を描き、当時は自分たちの才能を信じていた。しかし、今あらためて見ると、個性がぶつかりあうだけで調和していないことに気がつき、自分たちの才能に対する自信をなくしている。

(六) — ⑤ 「お返しに妙な節をつけて言っちゃった」とあるが、この時の隆文の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 学生時代の隆文の絵を見て笑いながら「また、絵、描いたら、いいじゃ、ないですか」と言う川野の不真面目な態度に反発を感じ、川野の口調を真似して「川野も、美大とか、行って、みれば」と言うことで、そのような態度は絵を学びたいという気持ちがあるならば先輩にあたる自分に対して失礼だということを伝えようとしている。

イ 学生時代の隆文の絵を見て笑いながら「また、絵、描いたら、いいじゃ、ないですか」と言う川野のからかいに怒りを覚え、その口調を真似して「川野も、美大とか、行って、みれば」と言うことで、川野も美大に行つて絵を描いてみればこの絵を描いた自分たちの美術に対する気持ちが理解できるようになるということを教えようとしている。

ウ 学生時代の隆文の絵を見て笑いながら「また、絵、描いたら、いいじゃ、ないですか」と言う川野に自分が教師であることも忘れてカッとなつてしまい、川野の口調を真似して「川野も、美大とか、行って、みれば」と言うことで、川野が美大には合格できないことをほのめかしてバカにしてやろうとしている。

エ 学生時代の隆文の絵を見て笑いながら「また、絵、描いたら、いいじゃ、ないですか」と言う川野に腹を立ててしまったものの、子どもである川野に対して正面から反論するのはよくないと思つたので、川野の口調を真似して「川野も、美大とか、行って、みれば」と言うことで、何とか言い返してやろうとしている。

(七) — ⑥ 「なんだか新鮮な気分」とあるが、隆文はなぜそのように感じたのか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 川野は普段は大人びた態度をとる所があるが、今は楽しそうにしている子供らしい様子を見ることができたから。

イ 川野は普段は他人を馬鹿にする所があるが、今は川野自身が馬鹿げた行動をしている様子を見ることができたから。

ウ 川野は普段は素直でなく屈折した所があるが、今は心から楽しそうにしている素直な様子を見ることができたから。

エ 川野は普段は否定的な態度をとる所があるが、今は自分の言葉を前向きに受け入れている様子を見ることができたから。

(八) — ⑦ 「じわりと頬が熱くなる」とあるが、この時の隆文の心情を四十五字以内で説明しなさい。ただし、句読点も一字と数える。

(九) — ⑧「隆文は早口で答えた」とあるが、この時の隆文の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 美大に進学したいという目標を素直に口にする子どもじみた川野に対して、「教えてやってもいい」などと偉そうなことを言ってしまう自分が、気づかないうちに教師として振る舞うのに慣れてしまっていることを意外に感じている。

イ 美大に進学することを夢みているだけの子どもじみた川野に対して、相手がまだ中学生であるにも関わらず美大受験の難しさを知る教師として「教えてやってもいい」と真面目に反応した自分の発言は的外れであると感じている。

ウ 美大で絵を描くことは素晴らしいことだと思いついて、美大卒業後に自分が社会で経験した厳しい現実を「教えてやってもいい」などと説教くさく言う自分は、まるで教師のようだと気恥ずかしく思っている。

エ 美大で絵を描くことに対するあこがれを口にする子どもじみた川野に対して、教師らしく「教えてやってもいい」と自然に言ってしまった自分に驚いて、もっともらしい理由をつけてその場を取り繕わなければならないと思っている。

(十) 壁画を見たことによって起こった、隆文と川野の心情の変化の説明として最も適当なものを、本文全体をふまえた上で次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア これまでは絵が描けないでいることを学校という職場環境のせいにしていた隆文だが、そのような心を反省するきっかけを持つことができた。また川野も失っていた本来の素直な気持ちを取り戻し、隆文を信頼できるようになった。

イ これまでは教師としての仕事にやりがいを持っていた隆文だが、川野に絵を教えるという新たな目標を見いだせた。また川野も元美大生である隆文に絵を教えてもらえるこれからの日々を内心楽しみに思うようになった。

ウ これまでは自分には絵を描く才能がないとすっかり諦めていた隆文だが、もう一度練習すれば上達するかもしれないと思えた。また川野も隆文の壁画に勇気づけられ自分でも美大に行けるのではと自信を持てるようになった。

エ これまではずまらない現状を受け入れるしかないと思っていた隆文だが、今の方が絵を上手に描けるかもしれないという可能性に思い当たった。また川野も隆文と打ち解けるようになり、美大への興味を口に出せるようになった。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

そもそも、なぜ「コミュニケーション」などという言葉が発明され^④ 1 頻用されなければならないのか。答えは [1] に明らかです。それは、この社会がメンバーに高度なコミュニケーション力を要求する社会だからです。そうでなければ、ここまでコミュニケーションに関する不安や恐怖が声高に訴えられることもありません。

実際、若者たちにとって最大の難関といえる就職活動では、コミュニケーションの有無は死活問題です。就職戦線では、勉強の成果や仕事の能力よりもなによりも、コミュニケーション能力が最重視される傾向がづづいています。

経団連による二〇一八年度「新卒採用に関するアンケート調査」では、「選考にあたって特に重視した点」としてもっとも多くの企業が選択したのが「コミュニケーション能力」でした。八二・四八パーセントでダントツの一位。「コミュニケーション」はこれで十六年連続で一位をキープしているとのこと。ちなみに「履修履歴・学業成績」は四・四八パーセントでした。

学校や仕事といった [2] なシーンにとどまりません。コミュニケーション力は、友人づきあいや恋愛、婚活といった [3] で親密な関係の構築にも必須のものとされています。コミュニケーションの持ち主はモテ、リア充、陽キャとして日の当たる存在である一方、コミュニケーションは非モテ、ぼっち、陰キャといった日陰者のレッテルを貼られます。こんなふうに日ごろから脅迫されていれば、若者のあいだでコミュニケーションへの不安が高まるのも不思議ではありません。① コミュニカ偏重の社会がコミュニケーションを生んでいくのです。

ただ、これではほとんどなにも言っていないにひとしい。論理的な帰結を確認しているだけです。先に挙げた四つのポイントから、なにか言えることはあるでしょうか。

少しだけなら言えそうな気がします。順序を逆にして四つめからいきましょう。

四つめのポイントは、「コミュニケーション」に注目が集まるピークが四月に集中していることでした。

考えてみれば少し不思議です。もしコミュニケーションというものを [4] な意味で、すなわち知覚・感情・思考の伝達という意味で理解するならば、それを行う能力は季節にかかわらず重要です。

じつのところ、現代日本でコミュニケーションと呼ばれているものは、(知覚・感情・思考の伝達という意味での) コミュニケーション能力とは別のなにかではないか、そう私は疑っています。むしろそれは、組織集団に適応する能力、言い換えれば場のノリ

に同調したり場のノリを支配したりする能力なのではないかと。人びとが組織や団体や共同体に新たに加入する機会の多い四月という時期に、待ってましたとばかり「コミュ障」の検索キーワードが激増する理由は、ここにあるのではないかと。

② こんな興味深い考察があります。学校空間において生徒たちのあいだで生じる人気や地位の序列、いわゆるスクールカーストにおいて、カーストの上位を占めるのはどのような生徒でしょうか。これまで多くの大人たちは、生徒のコミュニケーション能力によってカーストが決まると考えてきました。しかしこれは話が逆で、自分の意見を押し通せる生徒がコミュニケーション能力があると認識されてきただけかもしれないという指摘があります。カースト上位に属する生徒だけが意見を押し通すことを許容されているのであり、それがコミュニケーション能力だと勘違いされてきたのではないかと。

ひよつとすると、われわれは大人になっても、こうした学校でのスクールカーストの世界を引きずっているだけなのかもしれません。企業の経営者や採用担当者も、「ウチのノリと権力構造に適応しやすい人を選びます」とはさすがに言いにくいでしょうから、たんなる同調圧力をコミュニケーションというもつともらしい言葉で② 糊塗することになる。もつと言え、採用する側もされる側も、そしてまわりの人間も、こうした③ コミュニケーション概念の横領について見て見ぬふりをしながら日々をすごしている可能性があります。

そう考えると、二〇二〇年以降に「コミュ障」が四月に突出しなくなった④ トレンド変化にも説明がつきそうです。そう、コロナ禍にもなうリモート環境の整備によって、新人歓迎会などの組織集団への⑤ イニシエーションの効力が薄れ、メンバーがそれほどプレッシャーを感じなくて済むようになったのではないかと、というのが私の仮説です。

(※ ※ ※)

もし、⑥ 巷間で言われるコミュ力というものが、人間集団のノリや権力構造に適応する能力として用いられているとすれば、三つめのポイントも理解しやすくなるでしょう。

三つめのポイントは、コミュ力が重視される世の中で、その欠如態、否定形である⑦ 「コミュ障」のほうが言葉としては人気があるという点でした。これは、コミュニケーションにかかわる能力そのものよりも、仲間に入れなかったらどうしようという不安にこそ人びとの関心が向いている事実を示すのではないのでしょうか。一時大流行した「KY」（空気が読めない）の成立と同型です。KYにおいても、Yが指すのは空気を「読める」ではなく、「読めない」であるところが肝でした。

さて、ふたつめのポイントは、「コミュ障」はかなり新しい言葉であり、最近の若者がコミュニケーションに関して旧世代

とは異なる見方や作法を身につけている可能性でした。

これについては、いま挙げた「空気」がヒントになります。かつて評論家の山本七平が太平洋戦争における日本軍を例に指摘したように、この空気こそ、長いあいだわれわれを生かしても殺しもしてきた日本の宗教だからです。場を支配する空気を読めない者がKYでありコミュ障であるならば、日本社会はこの点に関しては戦前戦中となんら変わっていないことになります。最近の若者だけの問題ではありません（先に触れた就職活動におけるコミュ力偏重の傾向など、現代の若者がこうむる特有の困難も見逃してはなりません）。

最初のポイント、つまり⑤「コミュ障が「障害」ではなく「人」を指すことについてはどうでしょうか。いまや私は、それにはもっともな理由があると考えるに至りました。これはいわゆる日本型組織のあり方と関係します。

日本型組織とは、典型的には会社のことです。日本の会社組織は、欧米の「ジョブ型」と異なり「メンバーシップ型」であると言われます。

ジョブ型とは、メンバーの職務（ジョブ）を基準に成り立つ組織です。企業人事は職務にかかわるメンバーの能力（開発力、営業力など）をあてにして行われます。その能力が組織にとって不要になれば容易にリストラされることにもなりますが、人が自分なりの能力を発揮するのに適した組織です。他方でメンバーシップ型とは、その名のとおり会員制の組織で、正会員として認められた人を丸ごと抱え込んで世話をする組織です。メンバーはあらゆる職務に対応しなければなりません。組織の和を保つかぎりにおいて自分の地位は安泰です。

一概にどちらがいいとは言えませんし、グローバル化が進むなかで日本の会社組織も変わりつつあるようです。でも、少なくとも言えるのは、コミュ障への関心はメンバーシップ型組織にとって都合がよいだろうということです。

人がもちうるさまざまな能力や障害の内（ノリへの同調と権力構造への適応という意味での）コミュ力だけをとりだして、それをその人全体に対する評価とすることは、正会員と非会員の選別、正会員どうしの結束力の強化に役立つ、つまりメンバーシップ型組織の維持と強化に役に立ちます。つまりコミュ障への関心が高まるほど、メンバーシップ型組織は得をするのです。

念のために付け加えておくと、ノリに同調したり組織集団の権力構造に適応したりする能力は、それはそれで有用であるにちがいません。ただ人物評価にあたって、そうした意味での「コミュ力」が過大評価される風潮には疑問を感じています。

以上、「コミュ障」に関して私が気になっている四つのポイントを糸口として、現代日本のコミュニケーション状況について

て考えてきました。結果として、われわれがふだん「コミュカ」という言葉で表現している内容は、じつのところ知覚・感情・思考の伝達という意味でのコミュニケーションとは別のこと——ノリに同調したり組織集団の権力構造に適応すること——ではないか、という仮説に辿り着きました。コミュカ偏重の社会に息苦しさを感じるとしたら、理由はそのあたりにある気がします。

(吉川浩満よしかわひろみつ『哲学の門前』)

① 頻用……しばしば用いること。 ② 糊塗する……その場を取りつくろうこと。

③ トレンド……ここではインターネットで検索されることばの傾向のこと。

④ イニシエーション……集団に新たに加入するために経験する必要のある儀式のようなもの。

⑤ 巷間……まちなか。世間。

(一) 1 に入る最も適当なことばを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

ア 公的 イ 辞書的 ウ 私的 エ 論理的

(二) ① 「コミュカ偏重の社会」とあるが、「コミュカ」とはどういう能力か。(※※※)より前のことばを用いて三十五字以内で説明しなさい。

(三) ② 「こんな興味深い考察があります」とあるが、なぜ興味深いと言えるのか。その理由を説明した次の一文の

I に入る適当なことばを、指定された字数に従って本文中から抜き出して答えなさい。

I (七字) に位置する生徒は、これまでの考え方とは異なり、 I であるから II (九字) ができるので

あり、 III (十一字) があるからではないと考えられるから。

四) ③ 「コミュニケーション概念の横領」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア ノリと権力構造でコミュニケーションの方向性を巧みに誘導し、自分に都合のいい結果を導きだそうとすること。

イ コミュニケーション能力の有無を正しく測れない経営者や採用担当者が学校での地位や序列で社員を採用すること。

ウ 本来ならコミュニケーションとは異なるはずの同調圧力をコミュニケーションであるかのように見なすこと。

エ コミュカのない新入社員でも、リモート環境の整備で過度なプレッシャーを感じなくともすむようになってきていること。

(五) ④ 『コミュニケーション』のほうが言葉としては人気がある」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 「コミュニケーション」はコミュニケーション能力を巡る概念であるという点で「コミュカ」と共通しており、人気があるのは当然だから。

イ コミュニケーションできなかったらどうしようという不安から、自己と「コミュニケーション」ということばとを結びつけて用いる人が多いから。

ウ なぜ人が「コミュニケーション」になるのかはつきりしないが、「コミュカ」が重視される中で「コミュニケーション」の状態に関心があるのは当然だから。

エ 「コミュニケーション」と「コミュカ」は対の表現なので、「コミュカ」よりも目新しい「コミュニケーション」の方に注目が集まるのは当然だから。

(六) ⑤ 「コミュニケーションが『障害』ではなく『人』を指す」とあるが、どういうことか。それを説明した次の文章の I III に入る適当なことばを、指定された字数に従って本文中から抜き出して答えなさい。

I (八字) の特徴を持つ日本社会においては、メンバー間の II (六字) が主な関心事となる。そのため、人の持つ III (十字) の中でも組織に役立つものに関心が集まり、さらに妨げとなるコミュニケーションの障害にも関心

が持たれた。その過程で「コミュニケーション」が、コミュニケーションに障害のある人自身を指す便利なことばとして用いられるようになったということ。

(七) 本文の内容と合うものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 「コミュ障」は日本では最近になって問題視されることが多く、特に新年度の始まる四月頃に最も注目される。

イ 本来一つの障害の名称にすぎなかった「コミュ障」は、今では日本社会そのものの問題を表す言葉となっている。

ウ メンバーに高い「コミュカ」を求める社会では、その持ち主が仕事ができる人間であると周りの人から見なされる。

エ 「コミュカ」は、知覚・感情・思考の伝達という意味でのコミュニケーション能力とは違う意味合いを帯びている。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 1 河内の国、日下の里に、木こりを② 2 業とする貧者清七といへる者あり。母は富人の家の③ 3 乳母たりしかば、貧しき世を経て、④ 4 口腹のことに儉する能はず。しかるに、この子孝ありて、朝には人よりも疾く山に入り、夕には人よりも後れて帰り、その間に他二人にあたるばかりの業をなす。その一人が分は⑤ 5 常のまかなひに充て、① 1 一人が分をもて母の好める食をととのへ、乏しげも無くもてなしけり。

ある日、母、鶉のあぶりものを望みたりしに、その日は暮れたれば、明くる朝疾く起きて、市に行きて求めんと用意したる時、窓に当たるものの② 2 音せしかば、「童どもが戯れに、③ 6 土くれなど打ちけるよ」とおぼえながら出でて見るに、鶉二羽、落ちてありければ、B 喜びて疾くすすめけり。

※ ける⑦ 7 なめりと、その里の⑧ 8 豪農日下氏伊駒山人の話なりとなん。

(『近世畸人伝』)

- ① 1 河内の国、日下の里……現在の大阪府東部の地名。 ② 2 業……仕事のこと。
- ③ 3 乳母……裕福な家の子どもの養育を任されていた人のこと。 ④ 4 口腹のこと……食事のこと。
- ⑤ 5 常のまかなひ……日々の暮らしに必要な費用、生活費のこと。 ⑥ 6 土くれ……土のこと。
- ⑦ 7 なめり……「くのようだ」の意味。
- ⑧ 8 豪農日下氏伊駒山人……江戸時代中期、大阪府東部にあった日下村の裕福な庄屋の家に生まれた人物。「伊駒(生駒)山人」と名乗り、漢詩が巧みなことで有名だった。

(一) 本文中の「は「清七」の心中語(心の中で思っていることば)を表しているが、他にもう一か所ある「清七」の心中語を十字以内で探し、その部分を抜き出して答えなさい。

(二) A「他二人にあたるばかりの業をなす」 B「喜びて疾くすすめけり」とあるが、その意味として最も適当なものを、後のア～エから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。

A
 ア 母と清七がするはずの二人分の仕事をした。
 イ 普通の人の二人分に相当する仕事をした。
 ウ 木こりの仕事とそれ以外の他の仕事もした。
 エ 母と清七の分以外に二人分の仕事をした。

B
 ア 喜んで早く母と食べようと外へ進んだ。
 イ 喜んで急いで捕らえようと外へ進んだ。
 ウ 喜んですぐに市へ行くよう母に勧めた。
 エ 喜んでさっそく母に食べるよう勧めた。

(三) ① 「一人が分をもて母の好める食をととのへ」とあるが、「清七」はなぜそのようにしたのか。その理由を、一段落の内容を踏まえ、次の形式に合うように答えなさい。ただし、(I)には本文中から指定された字数のことばを抜き出し、(II)にはあてはまる最も適当なものを後のア、エから選び、記号を○で囲みなさい。

清七の母は、以前 (I 七字) だったので、(II) から。

II
 ア 貧しい生活を送ることに慣れてしまっても、食べ物好き嫌いを直そうとしなかった
 イ 貧しい生活を送るようになってしまっても、食費を抑えることができなかった
 ウ 貧しい生活を送るようになってしまっても、食への執着を無くそうとしなかった
 エ 貧しい生活を送ることに慣れてしまっても、昔好きだった食べ物を忘れられなかった

(四) ② 「音」とあるが、「清七」はどのようにして起きた「音」だと考えたか。次の形式に合うように、指定された字数で答えなさい。

() 二十字程度 () 音だと考えた。

(五) ※ にあてはまることばとして、本文全体の内容を踏まえ、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 木こりの技を極め イ 勤勉の徳の重なり ウ 孝のまこと至り エ 仏の験現はれ

【四】 次の(1)～(6)の——を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 家族に不幸が続き私はヒタンにくれた。
- (2) 戦時中にフンシツした絵画が発見された。
- (3) 世界には今でもキガに苦しむ人がいる。
- (4) 社会問題をコクメイに描き出した本。
- (5) 私をナグった男はすぐに逮捕された。
- (6) 生活費をカセぐ手段がまったくない。

【五】 次の(1)～(4)の四字熟語の□に入る漢字をア～エから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。またその四字熟語が()に最もよくあてはまる例文を後のA～Eから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | 朝令暮 | □ | ア | 戒 | イ | 改 | ウ | 会 | エ | 開 | |
| (2) | 針小 | □ | 大 | ア | 長 | イ | 劍 | ウ | 広 | エ | 棒 |
| (3) | 千載一 | □ | □ | ア | 途 | イ | 偶 | ウ | 隅 | エ | 遇 |
| (4) | 公平無 | □ | □ | ア | 視 | イ | 氏 | ウ | 私 | エ | 師 |

【例文】

- A 歴史家の研究は常に()でなければならぬ。
- B 政府には一定の方針がなく()で現場は混乱している。
- C 私はこの()の機会をとらえなければいけないと思った。
- D 群衆はただ()するのみで団結することはなかった。
- E 雑誌は芸能人のスキャンダルを()に書き立てる。

〔六〕 次の文章の —— ①②③④⑤⑥の語の品詞名を後のア～コから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。

歴史小説を書いていると、読者には①ちよつと想像もできないほどバカバカしいところで②苦勞しなければならぬものなのである。

たとえば女性の名前である。

史上有名な女性の名前③ならむろん苦勞の必要は④ないが、たとえば信長の母の名は何であるかという段になると⑤大騒ぎになる。系図を捜し⑥ても、名はでてこない。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|-----|---|------|---|-----|---|-----|
| ア | 名詞 | イ | 連体詞 | ウ | 副詞 | エ | 接続詞 | オ | 感動詞 |
| カ | 動詞 | キ | 形容詞 | ク | 形容動詞 | ケ | 助詞 | コ | 助動詞 |

九	八			五	四		一	
ア イ ウ エ				ア イ ウ エ	3	1	ア イ ウ エ	
					アイウエオ	アイウエオ	（二）	
					ア イ ウ エ	アイウエオ	（三）	
				（六）	ア イ ウ エ	アイウエオ	（四）	ア イ ウ エ

二												
三	一	二		一								
ア イ ウ エ				1	ア イ ウ エ							
				2	ア イ ウ エ							
				3	ア イ ウ エ							
				4	ア イ ウ エ							
				（三）	ア イ ウ エ			I				
									（四）	ア イ ウ エ		
											（五）	ア イ ウ エ
									（六）	ア イ ウ エ	II	

三	二		一			
ア イ ウ エ			I			
			（四）	ア イ ウ エ		
					（五）	ア イ ウ エ
			（三）	ア イ ウ エ	II	（二）
						A
			（六）	ア イ ウ エ	（四）	（二）
						（五）
			（三）	ア イ ウ エ	（四）	B
						アイウエ

五	四				
ア イ ウ エ			(1)		
			(2)		
			(3)		
			(4)		
			(5)		
			(6)		
			（三）	漢字	漢字
			（一）	漢字	漢字
			例文	例文	例文
			A	A	A
B	B	B			
C	C	C			
D	D	D			
E	E	E			

六	六		五										
ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ													
					⑤	③	①						
					⑥	④	②						
					（三）	ア イ ウ エ	オ カ キ ク ケ コ	（四）	ア イ ウ エ				
										（六）	ア イ ウ エ		
												（七）	ア イ ウ エ
										（三）	ア イ ウ エ	（四）	ア イ ウ エ
					（六）	ア イ ウ エ	（四）	ア イ ウ エ					
									（七）	ア イ ウ エ			